
機関車トーマス -the last ride-

kon(名前募集)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機関車トーマス - the last ride -

【Nコード】

N9055X

【作者名】

kon (名前募集)

【あらすじ】

時代遅れになった蒸気機関車。トーマスたちは機関庫に押しやられ何年も使われなかった。

ある日三代目局長ステイブン・ハットが現れ、トーマスたちに解体処分を言い渡す。

旧世代と新世代の終わる事のない争いの構造を見事に書ききっていない世紀の凡作。ここに誕生！

前編（前書き）

鉄道についての考察はしていないので鉄道マニアの方は見ないほうが…。
なぜこんなものを書いたのかわかりません。

前編

機関車トーマス - the last ride -

時代と戦った男たちという、お話。

To the memory of
The losers beaten by
history

朝がやってきた。機関庫に光が差し込む。外で作業員たちの声が聞こえ始めた。仕事の時間だ。だが機関庫の扉が開かれる事は、ない。

この機関庫にはトーマス、エドワード、ヘンリー、ゴードンが収まっている。みんな起きているのだが何もしゃべらない。ここ数年はずっとこんな調子だった。

ここ何年かの交通の発達、技術の進化は目覚ましいものだった。電気機関車の登場、発達、改良。高速鉄道の概念。燃費効率の向上。さらにはハイブリッド機関車なるものまで出てきた。トーマスら蒸気機関車は環境への負担や燃費の悪さから必然的に主たる戦力からずされていった。そして遠い昔、いつものように機関庫に収まって以来、彼らの目の前の扉が開く事は無くなった。誰も口にしないが自分たちのレールはなくなったのだと誰もがわかった。エドワードもヘンリーもゴードンも基本的にはしゃべらない。一日にいくつ言葉 exchanges だけで、あとは目の前の扉を眺めるのが日常だった。ここに訪れる作業員もいないため、外で聞こえてくる会話がすべて

の情報源だった。節々に聞こえる会話からは、新しい線路ができたとか、新型の機関車が運用されるとかそんな話ばかりで、少なくともトーマス達が現場に復帰する話とはほど遠い話題だった。隣の機関庫にはジェームス、パーシー、トビー、ダックが収まっているが似たような状況だろう。

唯一、隣の機関庫と壁越しに一番近いゴードンは大声を出せば声が届く位置にいた。向こうにいるのはジェームスだ。もちろん向こうの声も聞こえないわけではない。押し込められた当初こそ互いの状況を伝え合ってたものだが次第にそれも無くなり、今ではまったく交流は無い。

彼らは一部愛好家の間でしか語られない存在になってしまったのだ。

朝がやってきた。機関庫に光が差し込む。

外で作業員たちの声が聞こえ始めた。仕事の時間だ。今日も目の前の扉を見つめながら一日を終えるのだ。沈黙と静寂を時間に混ぜ合わせ搅拌したような空間が場を満たしている。ここには時間と空間の区別が無く、始めと終わりが地続きの循環がすべてなのだ。目の前に差し込んでいる一筋の光のような無限性。トーマスたちもまた無限だった。すると光の筋が大きく、一本の棒になり、さらには長方形に伸びついには視界を埋め尽くす波となってトーマスを襲った。

なにが起きたのかトーマスはわからなかった。やがてそれは扉が開かれた事だとわかった。

「やあ、元気かねトーマス？エドワード？ヘンリー？ゴードン？」

巻き起こる思考の渦。結合されるシナプスにより伝わる電気信号。光の瞬きのように呼び起こされる記憶。時にそれは苦痛を伴った。

「トップハム・ハットさん」

四つの機関車は同時に声を出した。

シルクハットに仕立てのいいスーツ。恰幅のいい中年男性。ソドー鉄道局長、トップハム・ハット卿だった。

「ハッハッ。私はステイブン・ハットだよ。トップハムじいさんはとっくの昔に死んでしまったよ。今は私が局長をやっている」

「ステイブンだって！あのステイブン坊やか！」

トーマスたちの記憶にあるステイブンは緑のシャツに赤いズボンをはいた小さい男の子だった。

「残念だが、再会を祝うためにここへ来たのではない。今日は伝える事があってやってきた」

「もしかして、僕達また働けるんですか！」

ヘンリーが興奮したように声を出す。

「いや、ヘンリー。そうではない。実は新しい電気機関車を買ってね。車庫がたらんのだ。そこで君達は数日中に解体処分される事が決定した。売却という案も出たのだが外へ運び出すにも金がかかるし何より買い手が付かなかった。今日ここに来たのはその通達のためだ。事前に報告しておいたほうが君達も覚悟ができるというものだろう」

解体だって？僕達を解体するのか？トーマスは混乱してしまった。

「なんだって！冗談じゃないぞ！解体だなんて俺達を何だと思ってるんだ！」

一番最初に声を張り上げたのはゴードンだ。テンダー式の大きな機体が揺れる。

「そうだ！解体なんてさせないぞ！」

「そうだそうだ！」

トーマスとエドワードも抗議の声を上げる。彼らは機械ゆえ死の概念は無かったがそのかわり人に忘れられることへ恐怖を抱いていた。抗議はつきつけられた本質の喪失と忘却への反抗だ。

「ジエームスツ！ジエームスツ！！聞こえるか！返事をしろ！ジエームス！」

ゴードンが隣の機関庫にいるジエームスに呼びかける。返事はない。「ジエームス！聞こえないのか！俺達を解体するなんて言ってやがるんだ！お前も何とか言えジエームス！」

返事はない。

「ゴードン。ジエームスはもういないよ。ついこの間先んじて解体作業を終えたばかりだ。気づかなかったかな？」

「何だつて…。じゃあパーシーは！トビーは！ダックは！」

「作業は車庫あたり同時に行われる。4機とも解体済みだ」

「嘘だ…」

トーマスはレールが消えるような絶望に襲われた。同じレールを走った仲間がもういない。

ジエームスの憎まれ口もパーシーの笑い声ももう聞けないのである。やさしいトビーも仕事熱心なダックの走る姿ももう見れないのである。

ポオーーー

突然汽笛が鳴った。あたりが蒸気の白い煙で覆われる。

ポオーーー

蒸気機関であることをことさらに主張するような汽笛。それはヘンリーの機関車からだった。

「ヘンリー！なにをするつもりだ！」

ポオーーー

ステイブンの問いに汽笛が答える。

「ヘンリー！やめるんだ！」
トーマスにはヘンリーが何をするのかわかっていた。いや機関車なら誰でもわかるだろう。ボイラー室を燃やし蒸気を噴出するということが意味するのは一つしかない。走る事だ。
「殺してやるッ！」

ドオオオンッ

走り出したヘンリーが扉にぶつかる。機関庫全体が揺れた。ゴードンと同じく大型のテンダー式機関車はバックと全身を繰り返し建物をゆるがせる。ステイブンも近づく事はできなかった。

「ヘンリー！落ちて着くんだ！」

「やめるヘンリー！」

トーマスたちの声もヘンリーには届かない。憎悪にボイラー室を燃やした機関車はついに扉に穴を開け走り去った。

「……くそ……。トーマス！ヘンリーをとめてくれ！俺達じゃ間に合わん！」

ゴードンが叫ぶ。今扉が開いているのはトーマスの車線だけだ。

「わかったよ！」

トーマスのボイラー室に火がともる。何年ぶりかの蒸気と車輪を軋ませながらトーマスは出発した。

あとを追うようにステイブンがドタドタと駆け去っていった。

何年ぶりの走行だろう。こんな状況じゃなければ最高の走行日とだ。ほほに当たる風、信号の音、踏み切りで待つ人々。すべてが懐かしかった。あふれ出る思い出は白い蒸気にかき消され、やがてヘンリーの姿が見えた。

「殺してやるッ！殺してやるッ！殺してやるッ！」

「よせ！止まるんだ！ヘンリー！」

ヘンリーにはまったく聞こえていないようだった。さらに加速して

いく。怒りの蒸気を吐き出しながら。

「くそ……！レールが違っただけでとめる事もできないのか……！」

そのとき、ヘンリーの路線上の先に別の機関車が止まっていた。見たことのない型だ。トーマスたちがしまわれていた間に出てきた後継機だろう。

「殺してやるッ！殺してやるッ！殺してやるッ！」

「よせッ！ぶつかるぞヘンリー！止まれ！」

「うおおおおおおお」

激しい衝突の音。脱線するかと思ったが、ヘンリーは無事だった。

一方ぶつかられた機関車は衝撃で数十センチ動かされていた。

「なんだ？一体」

「ヘンリーのトップスピードでキズ一つ付いていないだって……？」

これが現役機関車なのか？その新型は転車台で向き直し、顔をこちらに向けてきた。

「何かと思ったらおいほれ蒸気機関車じゃないか。貴様が、いきなりぶつかってきた奴は」

「うるさいッ！殺してやるッ！」

「フンッ。お前らか。こんど解体されるっていうSL共は。その様子じゃ納得いかずにご立腹でところか！いいだろう！引導を渡してやる！かかってこいロートル！」

「やめるんだ二人とも！」

「やかましいぞッ！SLごときが俺に指図するつもりか！さあどうしたかかって来いッ！ガッツを見せるッ！」

「うおおおおおおお」

ヘンリーの機体が轟音をあげて走る。衝突。衝撃の波がトーマスを襲う。横なぎに吹き抜ける風の圧力が木々をなぎ倒し、ガラスを割り、雑草の一つまで抜き去る。トーマスはなんとか脱線を免れた。顔と顔の間から火花が飛び散る。レールが叫び声が耳を貫いた。

「……所詮旧式という事か。この程度では俺は動かせんぞ。期待はすれだよ、ヘンリー？機関庫に戻してやるうッ！」

ギギギ　　と車輪の空回る音がする。

「なんだって…そんなバカな…」

ヘンリーの機体は新型に押されてゆっくり後退している。ありえない光景だ。ヘンリーのような大型　機関車が押し負けることなどトーマスの常識では想像もつかなかった。

「さあ！どうしたヘンリー！押し負けてるぞッ！ボイラー室を燃やせッ！車輪を軋ませろッ！空を覆うほどに蒸気を噴き出せッ！もつともつとだ！！」

「あああああああ」

完全に押し負けているヘンリーの機体はどんどん後退している。それはどんどん加速し、やがてヘンリーの前身は持ち上げられ前輪が浮き上がっていた。

「止まってくれ！このままでは機関庫に衝突してしまうっ！」

「貴様あ…。うつとしいぞッ！なまっちよろいSLが！これは正当なる報復行為だッ！こいつは俺を殺そうとしたッ！しかも旧式ごときがッ！許せるものかッ！」

「くそオ…。いったいどうすれば…ヘンリー！何とかして奴を押し返すんだ！」

「くそお…くそお…殺してやる…殺してやるぞ…」

「あきらめるな！このままだと死んでしまうぞ！」

「もう遅い！終着点が見えたぞッ！」

機関庫が遠くに見える。しかしすでに90キロ程度に達しているこの速度ではあと2、3分たどり着いてしまう。

「さあヘンリー！最後に言い残す事はないかッ！」

「うとう…絶対…絶対殺してやる…」

「ハァーハッハッ！！覚えておこう！」

機関庫はもう目の前だ。ダメ押しに加速していく二つの機関車はやがて機関庫に吸い込まれていく。

「ヤメロオー…ッ！！」

トーマスの絶叫とすさまじい破壊音が重なる。やがて静寂と共に機

関庫から煙が上がる。トーマスは無力感にさいなまれながらのろのろと機関庫の前で止まった。

「ヘンリー……」

絶望の底を覗き込むようにトーマスは目を落とした。深い深い闇をトーマスは味わった。

。

何か音がする。

カラカラカラ

それは車輪だった。

カラカラカラ

カラカラカラ

カラカラカラ

永遠を思わせる車輪の循環はトーマスの体にあたりその役目を終える。トーマスの目の前に円が描かれた。

それはヘンリーの前輪だった。

顔を上げる。機関庫から煙が噴き出している。煙は空を覆い、とどまることなく上っていく。「あ……」

一瞬、煙の中にヘンリーを見た気がした。こちらに笑いかけ車輪を回している。しかし風に遊ばれ、ヘンリーは姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9055x/>

機関車トーマス -the last ride-

2011年10月25日02時06分発行